双海真美「ふたりぼっち」

葵屋

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人で一人が一人と一人になる話。

あるいは二人の子どもが少しだけ大人になる話。

目次

前編 …… 1
後編 …… 13

前編

生まれたときから真美と亜美はいつも一緒でした。好きな小物も、嫌いな食べ物も、気になる男の子も、全部全部、真美と亜美は同じでした。一卵性双生児の真美と亜美は、顔も、身長も体重も、体型も全部同じで、よく見ても見分けがつかないほどに、鏡写しのようにお互いそっくりでした。

学校のクラスだけは違いました。双子は同じクラスにはなれないのです。それでも友達は同じでした。得意な科目も、通信簿の成績も同じでした。真美と亜美は二人でしたが、一人でもありました。そしてそれは、二人にとっては当然のことで、誇りでもありました。

真美は亜美のお姉ちゃんです。亜美は真美の妹です。それでもあんまり一緒にいるので、パパもママも、どっちが真美でどっちが亜美なのか、わからなくなってしまいました。パパもママも友達も先生も、みんなみんなわからなくなってしまったので、真美も亜美も、どっちが真美でどっちが亜美なのか、わからなくなってしまいました。

自分でもわからなくなってしまったので、ある日、自分たちで決めてしまうことにしました。そして、目印も付けるようにしました。

「じゃあわたしは真美になる」

「じゃあわたしは亜美になる」

「真美は今日から自分のことを真美って言うよ」

「亜美は今日から自分のことを亜美って言うよ」

左で髪を結うのが真美。右で髪を結うのが亜美。そうすれば、一目で真美と亜美がわかります。

真美にとっても亜美にとっても、自分がどっちであるかは大した問題ではありませんでした。けれど、二人で一人であるためには、二人が一人になるわけにはいきませんでした。重要なのは二人が一緒にいることで、一緒になることではありません。それでも、二人が「真美と亜美」であるならば、どっちがどっちかということは、二人にとって意味のないことでした。ただ、「真美」と「亜美」のふたりがそこにいるならば、それでもう十分でした。少なくとも、真美にとっては。

何でも一緒とは言いましたが、全てが同一というわけではありませんでした。いえ、はじめは同一だったものに、すこしずつ、ほんのすこしずつ不純物が混じるようになっていきました。真美よりちょっとだけ好奇心が強い亜美。亜美よりちょっとだけ我慢強い真美。友達にはわかりません。パパとママだって気づかないでしょう。それでも、真美にとってその不純物は到底受け入れられないものでした。

なので真美は不純物を取り除くことにしました。真美と亜美は、好きな小物も、嫌いな食べ物も、気になる男の子も、全部全部、同じなのですから。だから、たまに、本当にごくまれに、真美の気持ちとはほんのちょっぴり違うことをしても、そんなことは些細なことでした。だって、真美は亜美のお姉ちゃんで、亜美よりもほんのちょっとだけ我慢強いのですから。

§

アイドルになりたい。そう言い出したのは亜美の方からでした。真美も目立つことは好きなので賛成でした。なのでママに相談すると、快く応援してくれました。パパはちょっと不安だったようですけれど、ママが説得してくれました。ママも真美と亜美と同じで、目立つことが大好きなのです。

さっそくいろんな芸能事務所を探してみると、胡散臭いものからテレビで名前を聞くようなところまで、実にいろんなところが見つかりました。真美と亜美はもちろん、パパもママも、どこの事務所がいいのかよくわからなかったので、直感で選ぶことにしました。そうして選ばれたのが765プロダクションです。知ってる芸能人なんていない、むしろ本当に機能してるのかもわからないような事務所でしたが、亜美は直感を信じることにしました。もちろん真美もです。

オーディションなどが定期的に行われているわけではないようなので、ママが直接電話で応募すると、なんと社長自ら会いたいと言われました。なので次の週末に会いに行くことにしました。パパはお仕事が忙しいので、亜美と真美と、ママが一緒に行くことにしました。

繁華街を抜けたところの雑居ビル。果たして本当にこんなところに芸能事務所なんてあるんだろうか。そう思っていましたが、道路に

面したガラス窓に大きく「７６５」とテープが貼られているのを見て、安心するのと同時に不安でいっぱいになりました。それでも訪ねてみると、中は思ったよりも綺麗で、少なくとも事務所として機能はしているようでした。

応接間に通されると、すでに社長が待っていました。不思議と真っ黒い輪郭しか印象に残らない人です。そんな真っ黒い社長が挨拶もそこそこに切り出したのは、衝撃の言葉でした。

「真美さんも亜美さんも、どちらも素晴らしい逸材だ。一目見てティンときた。けれど残念ながら、私の事務所はこの通り、あまり知名度があるとは言えなくてね。どちらか一人しか契約することができないんだよ」

真美も亜美もアイドルをやりたい気持ちは同じでした。けれど、「アイドルになれない」という思いよりも先に、真美と亜美が離ればなれになることの方が不安でした。かといってせっかくアイドルになれるチャンスを不意にしたくはありません。だから真美は考えました。いっぱいいっぱい考えて、とうとうひらめきました。

「じゃあ真美が亜美になるよ」

みんなのいぶかしげな視線を受けて、真美は続けます。

『双海亜美』に、真美と亜美の二人がなればいいっしょ。二人一役っていうの？　そうすれば、社長は一人分のおきゅーりょーでいーし、真美も亜美も、どっちもアイドルできるもんね」

ね、名案でしょ？　にっこり笑う真美に、亜美はきらきらと目を輝かせて、社長は苦笑いしていました。ママはちょっと苦い顔をしていましたが、真美が説得すると、しぶしぶその条件で契約することにしました。

アイドルの名前に亜美を選んだことに、特に理由はありません。ただ、最初にアイドルになりたいと言い出したのが亜美で、真美が亜美のお姉ちゃんで、亜美よりもほんのちょっとだけ我慢強いからでした。たったそれだけです。だって、本当は真美が「亜美」だったのかもしれないのですから。二人にとってはどっちがどっちかなんて、本当にどうでもいいのです。亜美にとっても、真美にとっても。

それから二人はアイドルとしての活動を始めました。どっちかがお仕事に言ってるときはレッスンに行って、学校で勉強して、夜はお互いに一日の内容をすり合わせます。真美と亜美は二人で一人の人間《アイドル》「双海亜美」になっていたのです。

一度だけ、真美は亜美に聞かれました。

「真美はさ、なんで『双海亜美』をやろうと思ったの？」

「んー？　どーゆーことさ」

「だってさ、真美は亜美の姉ちゃんなわけだし、ふつーこーゆーのって姉ちゃんの名前じゃん」

「まーねー」

「じゃあさ、なんで？」

「だってさ、亜美が言い出したんじゃんか。『アイドルになりたい』って」

「そりゃそーだけど」

「それになんかかっこいーじゃん！　真美が本当の『双海亜美』だったのだー！　なんて展開」

「うあうあー！　それじゃあ亜美は亜美の偽物ってことになるじゃんかー！」

「ふはははは―！　真美こそが本物の『双海亜美』！　亜美は真美の影武者にすぎんのだよ！」

「なにをー！」

真美は笑って誤魔化すしかありませんでした。だって、本当は真美も『双海真美』として活動したいなんて、亜美に言えるはずもありません。誤魔化して、気づかない振りして、亜美の代わりにちょっとだけアイドル活動を楽しんで。それで満足しなければ、真美には手段がないのですから。今さらアイドル『双海真美』なんて、誰も求めていないのですから。

§

実際のところ、真美は『双海亜美』でいること自体にはさほど不満はありませんでした。二人で一人の人間になると言うのは、念入りに二人のことをすり合わせる必要があり、この頃は特に多くなっていた

不純物を取り除くのに、大いに役立っていました。けれどその反面、二人一緒にいられる時間は極端に短くなり、比例して一人だけで経験する事柄が多くなりました。不純物どころではない異物感でした。

真美がアイドル『双海真美』になりたい理由もそこにありました。『双海真美』と『双海亜美』が双子としてユニットを組めば、一緒に同じお仕事ができます。一緒にいられる時間が増えます。そうすれば、いよいよ無視できなくなってきたこの異物感もなくなると思ったのです。

一方で、『双海亜美』はお仕事も増えてきて、その知名度も大きくなってきました。それに伴って、だんだんと真美が『双海亜美』をやる機会が減っていき、亜美が一人で活動することが多くなってきました。元々無理のある方法だったのです。毎日のすり合わせも億劫になり、亜美が一人でアイドルになった方が楽なのは明らかでした。学校でも亜美がアイドルをっていることが広まり、真美がアイドル活動のために抜け出すのが難しくなったことも原因の一つです。

それでも、その頃になると、以前の不況ぶりから見違えるようになった765プロは、新しくアイドルと契約する余裕も出てきました。プロデューサーも二人に増えました。なので、思い切って真美は社長にお願いすることにしました。どうか真美も一人のアイドルにしてください、と。

果たして社長からは快諾されました。社長としても、双子とは言え、いつまでも真美に二人一役を強いるのは不憫でした。それでも真美がいいなら、と日和っていましたが、他ならぬ真美自身が相談にきてくれたのです。今までのことを謝ると同時に、是非『双海真美』としてがんばってくれ、と激励までとばしました。

真美が一人のアイドルになれる。亜美はそれを純粋に喜びました。双海姉妹の伝説の幕開けだぜー！なんて二人で意気込んだりしていました。思えば、この頃が一番アイドルとして楽しかったかもしれません。

§

そうして真美は『双海真美』として改めてデビューすることになり

ました。デビューに伴って、真美にはプロデューサーがつくことになりました。眼鏡で冴えない、けれど誠実で一生懸命な男の人です。一緒にがんばろう、と右手を差し出してきたので、手首だけの模型で握手をして、途中で手が取れた演技をすると、彼は真美の想像以上に慌てて、心配してくれました。生真面目で冗談の通じない、けれど真美のことに真剣になってくれる人。真美はすぐにプロデューサーのことが好きになりました。

真美の望みは亜美と二人で双子ユニットとして活動することです。けれど実のところ、すでに結構な知名度と人気を持つ亜美にとって、双子ユニットはむしろデメリットになる可能性の方が高いものでした。かといって真美と亜美が個人で活動したとしても、二人で仕事の奪い合いになってしまい、いいことはあまりありません。そこでプロデューサーは、真美をアイドルとしてではなくモデルとして活動させることにしました。

当然真美は不服です。けれど、すでに亜美が売れている以上、真美がアイドルとして活動するのが難しいことは、自分でも十分に理解できました。日に日に一緒にいられる時間がなくなって、共有できる話題も少なくなっている今、たとえ一緒にアイドルとして働けなくても、せめて同じ事務所で芸能活動をしていなければ、真美と亜美はばらばらになってしまいます。

そうして、亜美はアイドルとして、真美はモデルとして765プロダクションに所属することになりました。

§

そうこうしているうちに、765プロは所属アイドルも増え、ずいぶんと賑やかになりました。中学生や高校生が中心となって、それも女の子ばかりです。男性が社長とプロデューサーしかおらず、しかも社長は対外折衝などでほとんど社内にいないため、なんともかしましい様子を見せるようになりました。

仲のいい子も何人かできました。そもそも十数人しかおらず、それも社訓として団結を取り上げている765プロでは、喧嘩などが起きないように配慮されているため、みんな仲良しです。その中でも真美

は、高校生の萩原雪歩や、もうひとりのプロデューサーである秋月律子と一緒に話すことが多く、二人もまた真美のことを可愛がってくれました。もちろん、一番は亜美と一緒にいることです。けれど、亜美の仲良しは、天海春香と三浦あずさでした。

生まれたときから真美と亜美はいつも一緒でした。好きな小物も、嫌いな食べ物も、気になる男の子も、全部全部、真美と亜美は同じでした。けれど、今の真美と亜美は、職業も、性格も、仲の良い友達も、みんな違いました。

真美と亜美は、もう、二人で一人ではなく、一人と一人でした。

亜美はそれに、ずっと前から気づいていました。

真美は、亜美よりも前から気づいていました。

亜美はそれを受け入れました。

真美はそれを認められませんでした。

§

竜宮小町。秋月律子がプロデュースする、新しいユニットです。メンバーは、水瀬伊織、三浦あずさ、そして双海亜美の三人です。竜宮小町はすぐに知名度が上がり、いつしか律子は竜宮小町のプロデュースに専念するようになっていました。なので、残りのアイドルたちは、もう一人のプロデューサーに、あるいは自分自身がプロデュースすることになりました。当然真美もプロデューサーに見てもらうことになりました。

真美は、モデルの仕事をしているといっても、肩書きはアイドルです。社長にそうお願いをしていました。それは本当に名目だけで、現場ではジュニアモデルとしての扱いをされていましたし、雑誌にも真美がアイドルとして紹介されたことはありません。けれど、確かに真美はアイドルでした。

今、テレビをつけると竜宮小町が映っています。亜美がテレビで歌って踊っています。真美はそれをテレビで見ているしかありません。そこに真美はいません。そこに映る亜美は一人です。けれど、亜美は楽しそうに笑っていました。

§

「ねー兄ちゃん」
「んー？　なんだ、真美」
「アイドルって、楽しそーだね」
「そうだな。楽しそうだ」
「ねー」
「ああ」
「亜美、お仕事楽しそうだった」
「あの子はいつも楽しそうだ」
「ねえ、兄ちゃん」
「なんだ、真美」
「真美、本当はアイドルになりたかったんだ」
「ああ。そうだよな」
「今からでも……ううん。ごめんね兄ちゃん、わがまま言って」
「……俺はプロデューサーだから、みんなのことを考えなきゃいけないんだ。なるべく要望は受け入れるようにしているけれど、みんなが売れるためには、やっぱりどこかしら無理をしてもらうことになる」
「うん」
「だから俺は、みんなのプロデュースに関して、絶対の自信を持ってないといけないんだ。だから、俺は真美に謝らないし、負い目に感じることもない」
「……」
「……一つだけ、俺が真美に言えることがあるとすれば」
「うん」
「俺は真美がモデルになったことに後悔なんてさせない。いつか泣いて俺に感謝するときがくるから、そのときを楽しみにしているといいさ」
「……ははっ、兄ちゃんも冗談が言えるようになったんだね」
「俺はいつだって真面目だよ。俺はいつだって、真美、きみのことを真剣に考えてる」
「……そっか。なら、泥船に乗った気分でがんばるよ」
「そこは大船に乗ってほしかったけど、まあいいか」

「世界中の兄ちゃん姉ちゃんに、真美のせくちーでぷりちーな姿をみせつけるためにも、馬車馬のごとく働けよ、兄ちゃん！」
「おう、任せとけ」

§

一卵性双生児の真美と亜美は、顔も、身長も体重も、体型も全部同じで、よく見ても見分けがつかないほどに、鏡写しのようにお互いそっくりでした。パパもママも、先生も友達も、いつしか自分たち自身すらも見分けがつかないくらい、いつもいつも、一緒にいました。

双子も言うのは不思議です。何せ生まれる前から一緒にいるのですから、一緒にいるのが当たり前で、何も言わなくても相手の心がわかります。

真美にとって、世界とは、真美と亜美と、それ以外でした。真美にとって、亜美の気持ちは真美の気持ちと同じで、言わなくてもわかるのが当たり前で、言われても心がわからない他人は理解できない存在でした。何も聞かなくても真美は亜美の気持ちが分かりましたし、何も言わなくても亜美は真美の気持ちを分かってくれました。亜美じゃない人と話すときは、相手が何を考えているのかわからなくて、不安で、こわくて、とてもおそろしいものでした。嫌われていないか。傷つけていないか。疎まれていないか。真美にはわかりませんでした。

いたずらを仕掛けるのは、人の気持ちを知るために始めました。「これは大丈夫」「これはやりすぎ」「これはものたりない」そうやって確かめて、真美は安心していました。明朗な性格も、大仰な表現も、そうすれば他の人もわかりやすい反応を返してくれます。たとえ気持ちがわからなくても、推察することができます。そうして真美は生きてきました。そうしなければ真美は生きられませんでした。

真美にとって、亜美以外は、理解できない生物でした。

§

竜宮小町がＩＡ大賞にノミネートされました。残念ながら受賞はできませんでしたが、それでもアイドルとして一流の存在となったのは確かです。その頃になると、真美もモデルとしてそれなりに知名度

が大きくなり、何度かテレビや雑誌で取り上げられるようになりました。

いつしか『双海真美』と『双海亜美』が双子であることは周知の事実となっていました。隠していたわけではありませんから、知れ渡るのも当然です。もっとも、知名度としては亜美の方が圧倒的に上なので、真美は「あの『双海亜美』の双子の姉」というような扱いばかりでした。

ある日、真美は亜美と競演することになりました。この業界に入ってからの念願が叶ったのです。バラエティ番組へゲストとして呼ばれた竜宮小町のおまけのような扱いでしたが、真美には十分でした。最近では忙しくてろくに亜美とお話しできなかったので、仕事とはいえ久しぶりにゆっくり亜美といられるだけで、真美には満足でした。

知名度が上がってきたとは言え、真美はまだまだ有名人というほどではありません。テレビ局の楽屋だって、いろんな人と一緒に使う大部屋です。プロデューサーに連れられ、メイクと挨拶周りを終えると、すぐに竜宮小町の部屋へ遊びに行きました。

「やっほー！　遊びにきたよん！」

「おっ、真美じゃん！　久しぶりー！」

「久しぶりって……さっき一回挨拶にきたじゃない」

「あらあら、真美ちゃんいらっしゃい」

竜宮小町は、芸歴こそ短いものの、今や日本でも有数のアイドルユニットです。当然、まだまだ知名度の低い真美のような大部屋ではなく、個室を与えられていました。本来は、同じ事務所であるものの、先輩後輩として芸歴も人気も知名度も格の違う竜宮小町の部屋に真美が遊びに来るのは失礼ですが、真美と亜美が双子であることや番組の趣旨、そして事務所の意向もあって、半ば黙認されるような形でここにいることを許されているのです。そのことは、プロデューサーからはそれとなく、テレビ局の職員からは直接的にいわれました。

「みんなはもう挨拶周りは終わったの？」

「んっふっふー。聞いて驚け、我ら竜宮小町はすでに挨拶をすませているのだー！」

「なっ、なんだってー!?」
「うふふ、実は真美ちゃんが最後だったのよ」
「なっ、なんだってー!?」
「まあ、リハーサルまでまだ少し時間もあるし、ゆっくりしていきなさいよ」
「なっ、なんだってー!?」
「もういいでしょそれは!」
「もー、いおりんは甲斐性なしですなー」
「意味わかんないし、強いて言うならこらえ性がないでしょうが!」
三浦あずさはおっとりとして包容力のある、水瀬伊織は勝ち気で面倒見の良い性格のアイドルです。元気で天真爛漫な性格の亜美とのトリオは、こうしてみると、とてもバランスの良いものでした。
はじめは真美も、どうして亜美が竜宮小町なのか、どうして真美じゃないのか、と思うこともありました。自分でもわかるくらいの嫉妬です。そもそも真美はアイドル活動をしていないのですから、選ばれるはずがありません。けれど、真美は三人のやりとりをみて、たとえ真美も亜美と同じくらいアイドルとして売れていたとしても、やっぱり竜宮小町には亜美がいただろうな、と思いました。それだけ竜宮小町の三人はバランスのいいユニットでした。そして、そんなことを認めてしまった自分を知って、真美はひどく動揺しました。
その後、番組は無事成功に終わりました。四人とも特にミスもなく、ほどよくアピールできたでしょう。特に亜美は、竜宮小町に真美も加え、いつもに増して快活に話し、動き、とても楽しそうにしていました。そんな亜美をみて、真美もとても楽しくなりました。
収録後、竜宮小町はすぐ移動することになりました。今をときめく売れっ子アイドルユニットなのですから、スケジュールもとても厳しいものになっています。名残惜しそうにして去っていく三人を見送ると、真美は家へと向かいます。三人と比べてまだまだ知名度の低い真美は、その日、もう仕事はありませんでした。
一人になると、それまでずっと我慢していたものがあふれ出しました。ずっとずっと、それこそ765プロに所属する前から我慢してき

たものが、今になって止められなくなってしまいました。真美は亜美よりちょっとだけ我慢強いお姉さんでしたが、それでもまだ一三歳で、何よりも子どもでした。

それから一週間。真美は一切の連絡を絶ち、部屋に引きこもるようになりました。

後編

「たとえばもし、兄ちゃんが今火星のど真ん中にいて、周りには宇宙人しかいなかったとして、ねえ兄ちゃん、どうする？」

一週間ぶりに真美と会ったプロデューサーを迎えたのは、そんな質問でした。何をしていたんだ、心配したんだぞ。出かかっていた言葉を我慢して、プロデューサーはじっと真美を見つめます。

一週間閉じこもっていた真美の部屋（正確には真美と亜美の部屋ですが、亜美はこの一週間、真美に追い出されて客間で生活していました）は、厚手のカーテンが閉められ、電気もついておらず、まだ太陽も高いというのに真っ暗でした。真っ暗な部屋のなかで、真美は、女の子らしいベッドに、プロデューサーに背を向けて座っていました。

プロデューサーには、言うべき言葉も、聞きたい言葉も、たくさんあります。けれど、脈絡のないように思える真美のこの話が、とても大事なことであると直感しました。プロデューサーには、ただ真美の話を聞くことしかできませんでした。

「真美と亜美はさ、一卵性そーせーじで、そっくりの双子で、好きな小物も、嫌いな食べ物も、気になる男の子も、全部全部同じなんだよ。真美は亜美が何を考えてるのか、感じているのか、言わなくたって分かってたし、亜美もそうだった。

真美と亜美にとって、それは当たり前のことで、言葉にしないと何も伝えられないような人たちは、おんなじ形をしてるだけの化け物も当然だったんだぜ」

真美は笑っていました。とても楽しそうに、からからと快活に笑いながら語ってくれました。プロデューサーは、そんな真美をみて、きいて、とても悲しくなりました。

プロデューサーには仲のいい妹が一人います。学生時代には恋人だっていました。愛していると断言できます。けれど、自分のことのように感じることはできません。どれだけ仲がよくても、愛していても、しょせんは別の人間、他人でしかないのです。

けれど、真美と亜美は違いました。それが一卵性双生児だからなの

か、真美と亜美だからなのかはわかりませんが、二人はただの他人ではなくて、完全に別の人間でもなかったのです。真美にとって不幸なのは、そんな二人の関係が特別なのではなく、それ以外の関係をひどくいびつで特異なものであると捉えてしまったことです。すべてをわかりあえる亜美がいたからこそ、真美は、それ以外の人間とのかかわり方を学び、知り、身につけることが難しかったのです。

「ねえ、兄ちゃん」

「なんだ、真美」

「真美ね、がんばったんだよ。だってさ、パパもママも何考えてるのかわかんないし、学校の友達なんて何言ってるのかわかんないし、765プロのみんなだって優しいけど、裏で真美のこと疎ましく思ってるかもしれないじゃん。

知らないのはこわい。でもさ、知るのはもっとこわいじゃん。亜美のことは何もしなくてもわかったけど、みんなのことは何をしてもわかんない。だからさ、真美はがんばってみんなのことを知ろうと思ったんだよ。

でもさ、それってさ、その努力ってさ、本当に信用できるの？　見ることも、聞くことも、触ることもできない心を、勝手に推察して、ねえ、それって当たってるの？　本当に、真美の思うとおりに考えてるの？

兄ちゃん。ねえ、兄ちゃん。兄ちゃんは今何を考えてるの。何を思って真美に会いに来たの。何でいつも真美に優しいの。何で真美はモデルなんてやってんの。何でアイドルじゃないの。ねえ、モデルに転向してまで事務所にずっといる真美のこと、本当はうざいとか思ってるんでしょ。ゆきぴょんもりっちゃんも竜宮小町のみんなも、アイドルになれない真美のこと、本当は笑ってるんでしょ」

ねえ、兄ちゃん。

「こわい。こわいよ兄ちゃん。誰も信じられない。ねえ兄ちゃん、亜美の心もわからなくなった真美は、いったい誰なら信じることが出来るの？」

いつしか真美の言葉は震え、湿っていました。それでも、真美は泣

くことはありませんでした。かたくなにプロデューサーに背を向け、顔を見せず、肩も言葉も震えています。それでも真美は、涙は流しませんでした。

真美の不安は誰しもが一度は抱えるものです。人の心というものは、時には自分すら知り得ないものです。ましてや他人の心なんて、どれだけ言葉を重ねようと、思いを形に表そうと、結局最後は受け止める人の気持ち次第でしかありません。相手の言葉を、態度を信じるしかありません。

普通なら、最初から誰の心もわからない普通の人なら、自然とそうして妥協することが出来ます。けれど、たった一人、亜美の心だけでもすべてを理解することが出来ていた真美には、そんな妥協はとうてい許されるものではありませんでした。そして、その亜美の心すらもわからなくなってしまった真美は、唯一の心の拠り所を喪ってしまった真美には、折り合いをつけるのにとても時間が必要になるでしょう。その膨大な時間が、真美をとても苦しめ、限られた青春と若さを浪費し、悪影響を与えることでしょう。プロデューサーにとってそれは我慢の出来るものではありません。プロデューサーとして、一ファンとして、そして、一人の男として。

「真美」

プロデューサーはそっと背中越しに真美を抱きました。触れた瞬間、真美の肩が跳ねましたが、気にせず、優しく包み込むように、守るように、真美を抱きしめました。

何を言えばいいのかわかりませんでした。何を言ったところで、今の真美には信じられなかったでしょう。だからプロデューサーは、真美を抱き、ただ、真美の名前を何度も呼びました。人の温もりと柔らかさを伝えました。そんな行為がどれほど効果があるのかはわかりません。ただ、プロデューサーには、それしかする事が出来ませんでした。

けれど、そんな行為に、いつしか真美は声を上げて泣き、やがて疲れて眠っていました。

プロデューサーと向かい合って、安心したような顔をして、ずっと

ずっと、深く眠りました。

§

亜美にとって真美は、もう一人の自分のような存在でしたが、それと同じくらい「双子の姉」でした。考えなしで、我慢が足りない亜美は、けれどその分真美に我慢させていることに気づいていました。そして、それを真美が、いやだと思っていないことにも。

亜美は真美のことが好きです。真美がいなければ生きていけないと本気で思うくらいには、亜美は真美のことが好きでした。だって亜美は、真美がいるからこそ今まで生きてこられましたし、今だって好き勝手することが出来ます。だから亜美は真美のことが好きで、姉として尊敬していましたし、わかっていても真美に我慢させてしまう自分が嫌いでした。

亜美は自分が真美に依存していることがわかっていました。そんな自分がいやだから、いつまでも真美に頼ることのないように、他の人と関係を作ろうとしました。そんなときにきたのが竜宮小町の話でした。

アイドル稼業は思ったよりもずっとつらくて、いやな思いもいっぱいして、けれどこれまでのどんなことよりも楽しいものでした。だから、真美がアイドルではなくモデルとなると聞いたときも、モデル業の楽しさをいっぱい真美に教えてもらおうと楽しみにしていました。だって亜美は、アイドル活動が大好きで、その一環で行うモデル業も好きで、亜美が好きなものは真美も好きなのですから。

だから亜美は、真美が本当はアイドルをやりたいと思っていることも、モデル業をしかたなくやっていることも、亜美のことをどうしようもなく羨ましいと思っていることも、気づくことが出来ませんでした。そのころには、気づけるほどに真美のことをみることが出来なくなっていました。

亜美は真美に我慢させている自分が嫌いでした。そんな自分を変えようといろんなことに挑戦しました。でも、真美が部屋に引きこもったとき、そんな亜美の努力がまったくの無駄で、むしろ真美を追いつめていたことを知りました。

亜美がいつも真美を苦しめる。
亜美がアイドルをやると真美が苦しむ。
亜美がいなければ真美がアイドルをやれた。
亜美がアイドルを辞めれば真美は苦しまないで済む。
「だめよ」
客間で沈んでいた亜美は、その言葉に顔を上げました。水瀬伊織が、目の前で睨むように、腕を組んで仁王立ちしています。そばには秋月律子と三浦あずさもいます。なにしてんの、と亜美は小さくつぶやきました。秋月律子は呆れたように、三浦あずさは困ったように、ただ亜美のことを見つめます。
「亜美」
改めて水瀬伊織を見ると、やっぱり睨むようにしてこちらを見ていて、腕を組んで仁王立ちしています。端的に言って、とてもえらそうでした。竜宮小町のリーダーですから実際えらいのです。けれど、いつの間にか人の家に上がって部屋にきていた人間としては、とてもふてぶてしい態度でした。なのに、そんなことは全然気にならなくて、何でいるのとか、どうやって家に上がったのとか、そんな疑問もどうでもいいものでした。水瀬伊織の言葉だけが、今の亜美には重要でした。
「あんた、竜宮小町なのよ」
「うん」
「竜宮小町は私がリーダーなの。だから、私の許可なくして勝手なことは許さないわ」
「おーぼーだね」
「そうね。だから、って」
「だから？」
「いいこと、亜美。あんたはこのスーパーアイドル伊織ちゃんが率いる竜宮小町の一員なの。横暴でも、理不尽でも、途中で逃げ出すなんて真似、絶対にさせないわ」
水瀬伊織はいつも自信満々で、プライドが高くて、それに見合う努力をしてきた人です。けれど、彼女は決して人を軽視することはあり

ませんでしたし、むしろとても面倒見のいい性格です。だから、どこか彼女らしくない言葉に、亜美は少し気持ちが楽になったような気がして、つい思っていたことがでてしまいました。
「真美がいるからへーきだって。亜美が抜けても何とかなるよ」
「ならないわ」
即答、そして断言しました。
「あんたの代わりに真美がきても、竜宮小町は機能しないわ。それは別のユニットよ。竜宮小町が求めているのは、私とあずさと律子がほしいのは、亜美、あんたなの。真美じゃないわ」
真美じゃあ、あんたの代わりにはなれない。そんな言葉に、亜美は涙がでそうになりました。
「でも亜美と真美は双子じゃん。顔も身体も、心も、キャラクターも、大して変わんないよ。むしろ真美の方が亜美よりもずっとすごいもん。亜美じゃなくても、竜宮小町じゃなくても、真美と一緒ならおんなじくらい、いやもっと売れるから――」
「――さっきからうるさいのよ!」
我慢ならないというように、亜美の言葉をさえぎり、水瀬伊織が怒鳴ります。
「さっきからぐちぐちうるさいのよあんたは!
私は亜美がほしいっていってんのよ! たとえ双子の姉でも、真美がどれだけすごくても、あんた以外はいらないの! いいから黙って私についてきなさいこの馬鹿!」
亜美はずっと真美に罪悪感を覚えていました。だって亜美と真美は元々は同じ人間だったのです。それなのに、いつの間にか二人の心は分離し、真美ばかりに無理をさせるようになり、亜美はその事実にくるしむことになりました。二人で一人だったはずなのに、気づけば違うことばかりするようになり、顔を合わせることすら極端に減っていました。それはとてもつらくて、くるしくて、かなしくて。いつしか二人は、そんなものばかりを共有するようになっていました。
「私には、あんたがなに考えてるかなんて全然わかんないけど。それでも、さみしいときに一緒にいるくらいのことはできるわ。やなこと

があるなら一緒に泣くし、理不尽な目にあえば一緒に怒る。律子もあずさも、いえ、765プロのみんなが同じ。

人と人なんて、全部わからなくてもいいのよ。大事なことだけ信じられればいいの。だってそれが仲間ってものでしょう。だからいい加減真美にばかり頼るのをやめなさい。姉離れしなさいよ、このばか」

伊織の言葉は亜美にとってとても厳しいものでした。心のいちばん痛いところを突く言葉でした。でもその言葉が何よりも優しいことを、亜美はきちんと理解していました。

亜美はもう、真美と同じにはなれない。二人で一人にはなれない。一人と一人にしか、亜美と真美にしかなれない。

亜美はいつしか泣いていました。真美と別の人間になってしまったことが、嬉しくて悲しくて、大きな声を上げて泣いていました。

それはどこか産声のような泣き声でした。

それは奇しくも、真美が泣くのと同じ瞬間でした。

§

真美が芸能活動を再開したのは、それから一週間が経ってからでした。とはいっても、正式に活動を休止していたわけではありませんので、急きょキャンセルしてしまった仕事の関係者たちへと謝罪して回り、新たに仕事を手に入れるのに一週間かかったのです。信用が第一のこの世界で、こんだけ短時間で復帰できたというのは、たまたま人手不足の仕事があった運と、765プロの評判がよかったのでしょう。もちろん真美自身のそれまでの態度がよかったからこそ受け入れられたのはいうまでもありません。真美は、方針に不満があるとはいえ、モデル業がいやなわけでは決してありませんでした。

あのあと、社長にはこってり怒られました。休んだことではなく、それほどまでに追いつめられていたのに、ため込んでいたのに、どうして誰にも相談してなかったのか、と初めて見る厳しい表情で社長は真美を怒りました。そうして、そんな無理を真美に強いてしまったことを謝りました。

「団結」を社訓に取り上げる社長にとって、今回の件は責められるべ

き案件でした。契約当初の経営不振や「双子キャラ」の難しさなど、当時から今日までの様々な状況を考えると、真美と亜美が一緒にアイドルとして活動するのは難しかったでしょう。経営者として間違っていたとは思いません。それでも社長は、そんな経営者的な選択を後悔し、真美に頭を下げました。アイドルの夢や希望を無視するような、ただ金儲けの道具として使い潰すような、そんな方針に嫌気がさして新しく事務所を立ち上げた、若かりしかつての自分。それがいつしか憎んですらいた人たちと同じになってしまっていた事実に、社長自身が許すことが出来ませんでした。

「結局のところさ、真美はただ、兄ちゃんやしゃちょーを信じることができなかったんだよ。モデルだって別にやりたくないわけじゃなかった。ただ、真美は、亜美が羨ましかっただけ。そんで、真美が亜美と同じくらい楽しめるように兄ちゃんとしゃちょーががんばってくれるって、真美が信じられなかっただけなんだ」

事務所の社長室。ことの経緯を全て社長に話したあと、真美からこぼれたのはそんな言葉でした。縮こまって座る真美に、社長は優しく声をかけます。

「それは違うよ真美くん。私もプロデューサーくんも、もっときみに対して真摯でいるべきだったし、信じてもらえるように努力すべきだった」

「しゃちょーも兄ちゃんも、真美によくしてくれたよ。今ならわかる。でも、あのときの真美にとっては意味なかったんだ。真美にとって亜美以外は宇宙人だったし、宇宙人のことを信じられるほど、真美は優しくない」

「真美くんが我慢していることはよく知っていた。亜美くんといることに固執してることも。それでも、気づかぬ振りをして真美くんに甘えていた。真美くんが謝ることなんてない。

改めて言おう。真美くん、きみに無理をさせていたこと、そしてそれを知りながらも強要していたこと、本当に申し訳なかった」

「こっちこそ、お仕事勝手に休んでごめんなさい」

「うむ。ではお互いこれで手打ちにしよう。ところでその、仕事に関

してだが……いや、これはプロデューサー君に任せよう」
　先ほどまでの重い空気を振り払い、社長はいたずらっぽい笑顔で言いました。それにつられて、真美もようやく笑うことができました。
「えっ、なに、やっぱり真美、首になるの？」
　真美なりの冗談でした。けれど、笑いながらも、半分は本気でした。
「いやいや、そんなことはないよ。ただ、そうだね。ジュニアモデルという肩書きは、諦めてもらうことになる」
　目の前が真っ暗になる思いでした。
「……まーそーだよねー！　もともとそんなに人気があったわけじゃないし、こんだけ迷惑かけたら、そりゃあね、ちかたないね」
　ですが、文句を言える立場ではありません。どんな事情があれ、真美はその待遇でやってきたのです。急にわがままを言って多方面に迷惑をかけたからには、１３歳とはいえ、責任を負わなければなりません。
「……いや、そうだね。こちらにも責任があるのはいえ、この体制のままでは、いずれまたこのようなことが起きるかもしれない。禍根は元から断たなければなるまい。
　双海真美くん。きみとは、今期をもって契約を打ち切らせてもらう」
「……はい」
「ところで、近ごろ少し面白そうな構想が浮かんでね。上手くいけばこの７６５プロも大いに盛り上がりそうなんだ。ただ、それには今のアイドル達では何か足りない気がしてね……そうだ、プロデューサーくん。何かアイデアはないかい？」
「――そうですね、何か足りないのなら、それを足せばよいかと」
　突然背後から聞こえてきた声に、真美は驚いて振り向きます。
「名案でもあるかい？」
「案というほどでは。今いるメンバーで足りないなら、新しいアイドルをスカウトするだけです」
「ふむ、それは確かに。単純だがわかりやすい。ただね、スカウトするからにはトップアイドルになってもらわなければ困る。私たちも遊

んでいるのではないのだから」
「ええ、もちろん。すでにひとり、心当たりがありまして」
「心当たり！　この765プロとアイドルたちをここまで育てたきみが、そんなに期待する子か！」
「それはもうとびっきりですよ」
　朗らかな会話のくせに、やけに緊張してぎこちない表情で真美を見つめるプロデューサーは、右手を差し出して、言いました。
「双海真美くん。きみ、アイドルにならないか？」

§

「真美はさ、亜美になりたかったんだ」
「亜美は真美がお姉ちゃんでよかったよ」
「ふたりが一緒になれば、きっと、何よりも特別になれると思ってた。心が溶け合って、お互いのことが何もかも理解できて。そうすれば、なんにも不安がないと思ってた」
「真美と亜美がお揃いでいられるのは本当に嬉しかった。でも本当は、真美と亜美が違ってもよかったんだ。違うものをお互いに見つけていくのも、亜美は好きだったから」
「亜美じゃない人がこわかった。真美は亜美のことならなんでもわかったから、何もわからない人がこわかった」
「真美じゃない人はこわかった。亜美は真美のことならなんでもわかったから。でも、何もわからない人のことが少しわかった時、嬉しかったな」
「真美が我慢すればいいと思ってた。そうすれば、ずっと一緒にいられるって思ってた」
「真美が我慢するのがいやだった。そんなことしなくても、ずっと一緒にいられるって思ってたから」
「真美は亜美が好き。ずっと一緒にいたいとおもってた」
「亜美は亜美が嫌い。真美にずっと無理をさせて、それがわかっていても何も出来ないから」
「真美は真美が嫌い。亜美しか信じられないのが嫌い。本当はみんなのことを信じたい。なのにわからなくて、不安で、こわくなるのが嫌

い」
「亜美は真美が好き。亜美のことしかわからなくて、不安で、こわくて、信じられなくて。それでもみんなのことを好きな真美のことが好き」
「ねえ、亜美」
「ねえ、真美」
「真美たち、こんなに違う人間だったんだね」
「亜美たち、こんなに違う人間だったんだね」
「真美、亜美のこと、大好き」
「亜美、真美のこと、大好き」
「真美と一緒だ」
「亜美と一緒だ」
「それが一緒なら、いいよ。そう思うことにする」
「亜美も。これだけは、ずっと信じていられるから」

§

「真美ー、いるー？」
いつも通り、元気のいい声とともに大きく扉が開く。目を向けた先にいた亜美は、珍しく、髪を結わないで立っていた。
「あれ？　真美、髪下ろしてるんだ。珍しいね」
そう。正面を向いて鏡に映った真美も、髪を下ろしていた。視界の隅で揺れる髪が、なんだか新鮮な気がした。
「亜美さ、髪切りに行こうかなって思うんだけど、真美も一緒に行く？」
「んー……」
言われて、気づいた。美容室なんてしばらく行けてなかったから、思っていたより髪が伸びている。……真美の髪、亜美よりも長い。でもきっと、真美と亜美の違うところなんて、髪以外にもたくさんあるのだろうな。真美が今まで気づかなかっただけで。気づいても、誤魔化していただけで。
「真美はいいや。もうちょっと伸ばしてみたいし」
「そうなん？　お手入れ大変そうだねえ」

「うぁー、そういうのは言わないオヤクソクっしょ」
「ごめーんね。てへぺろ」
――結局のところ、真美の不安は何も変わってない。相変わらずみんなが何考えてるのか全然わからないし、誰かと話すのがすごくこわくなる時がある。
でも最近、双海真美のファンができた。「双海亜美の姉」じゃなくて、「双海真美」として見てくれる人が出てきた。パパとママが真美と亜美を間違えなくなった。真美と亜美で、別々の友達が出来た。
好きな小物を我慢しなくてもいい。苦手な食べ物を無理に好きにならなくてもいい。それにきっと、将来は、別々の人と結婚する。それでもいいって、ようやく思えるようになった。
改めて鏡と向き合い、身支度を整える。いつも通り、左のサイドテール。この髪ゴムも、きっと亜美なら選ばないだろうな。……そういえば、予約が一緒じゃないの、初めてだ。しばらくして、そのことにようやく気づいた。それがなんだか面白くって、小さく笑った。笑ってしまったことが、なんだか本当に嬉しかった。
「さってと。今日もアイドル、がんばりましょー！」
さあ今日も、生真面目で冗談の通じない、けれど真美のことに真剣になってくれる、馬鹿なあの人に会いに行こう。